

2. 新型コロナワクチン接種による腋窩リンパ節腫大が診療に与える影響の検討

公立学校共済組合 東北中央病院 診療放射線室 ○大場朝水 菅原秀明

奥出由布 佐々木竜馬

高橋幸子

【背景】

新型コロナワクチン接種側の腋窩リンパ節腫大が報告されており、日本乳癌検診学会ではワクチン接種後6～10週以降の乳がん検診を推奨している。

日本国内での新型コロナワクチン2回接種率は約80%である。(2022.4月時点)。診療、検診の場でも新型コロナワクチンによるリンパ節腫大を示す症例を経験することが推測される。

現在ワクチンによるリンパ節腫大については情報として知っているのみの状態であるため、実際の症例を検討し、今後の対応に役立つ情報を得たいと考えた。

【目的】

ワクチン接種とリンパ節腫大の関係を明らかにする。

【対象と方法】

- 2021年9月27日～10月28日に当院ドックを受診した441人に関して、コロナに関する問診票からコロナワクチンの接種の有無、接種時期、接種部位を集計する。また肺ドックのCT画像より腋窩リンパ節腫大の有無やサイズを集計する。
- 集計結果の解析を行う。

【結果】

- 接種後の経過日数と腋窩リンパ節のサイズの関係について、接種からの経過日数が短いほど短径も長径も大きい傾向が見られた。しかし相関係数は短径で-0.265、長径で-0.301と、強い相関関係は認められなかった。
- 接種後の経過週ごとの腋窩リンパ節腫大を示した受診者の割合について、接種からの経過日数が短いほど腫大が発生する割合が高い傾向が見られた。
- 期間ごとの腋窩リンパ節腫大の有無の割合について、接種後1～5週では腫大ありが34.5%、6～10週では9.9%、11～15週では3.4%だった。

【考察】

接種してからの期間が短いほどサイズが大きい傾向があり、腫大の頻度も高いことが分かった。接種して間もない時期では特に診療や検診への影響が大きいと考えられる。このことから、技師が撮影中リンパ節の腫大に気づいた場合には、ワクチン接種に関する情報を確認するなど、積極的な関与が必要だと考えられる。

また日本乳癌検診学会の提言である6～10週経過した受診者でも約10%で腫大がみられた。このことから、6～10週経過した場合でもワクチン接種による腫大の可能性があり、ワクチン接種に関する情報は継続して把握すべきだと考えられる。

【結語】

ワクチン接種とリンパ節腫大に関係が認められ、特に時間経過との関連が明らかになった。今現在もワクチン接種が行われており、接種者はリンパ節が腫大している可能性があることを念頭におき、日々の診療にあたることが重要であると再認識できた。